

旅日記2006

トコトン播磨満喫記

日本の誇る城郭を有する街・兵庫県姫路市へ

2006年夏

いつものようにふらりと出かける

戦国時代を生きた黒田官兵衛を追いかけ

自然と戯れた

その記録

歴史が彩る多くの景色に

魅せられる

旅日記2006

トコトン播磨満喫記

恒例となりつつある、夏の国内旅行。ここぞと思って選んだ先は、兵庫県姫路市。悩んだ末に、旅の期間は1泊2日、いつものように一人旅。姫路市に何があるん？去年の新潟に引き続き聞かれること。こういうところがあるんだなと、のんびり読みつつ楽しんでもらえたら。一度は訪ねてみる価値があるところ、それだけは自信を持っていることかな。

(1) 旅計画

旅地選択

さて、今年の夏はどこに行こうか、そんなことから、この旅は始まる。去年の新潟は、司馬遼太郎著「峠」にはまり、その主人公である幕末の長岡藩家老・河井継之助を追ってのものだった。本の中の人物に惚れ、その生き様を確かめに、歴史ある街を訪れる。基本旅は、そんな感じ。

施設の備わった観光地を楽しむのもいいが、やはり旅には、自分を満足させてくれるスパイスがほしい。本で得た知識を補う、現地で過ごす経験こそ、旅の目的。ただ遠くに行くためだけに、骨休めのためだけに、お金をかける気など、さらさらなし。その価値のある場所がどこかにあるか、まずそこから考え始める。

ここ数年行きたい場所トップに位置する鹿児島は、なんだかんで今回もパス。まず第一に、少々遠く、また目的とする場所が広範囲にわたり、数日で満足できる旅をする自信がないため。そして他にも、立てるべき計画のための時間が少ないことや、今年の職場旅行が鹿児島かもという情報も、二の足を踏んでしまう理由。

その他候補にあがった、岡山県へ備前焼作りというのは、まだ趣味の世界に生きるのは早すぎるとの理由から、早々に対象外。大分県の日田天領地に行くという案も、天領地だったということと、歴史ある街並みが残っているということ以外知識がなく、楽しむイメージがいまいちわからずに候補から外す。

無理に旅に出る気はないが、そんな場所が現れたから、この夏の旅を決意する。いつものように本から入り、相変わらずその著者は、司馬遼太郎。播磨出身で姫路城を居城とした戦国時代の軍師・黒田官兵衛を題材とした播磨灘物語にはまり、歴史を陰から大きく動かした官兵衛の生き様、考え方に大きく影響を受ける。豊臣秀吉の参謀として大きく力を発揮し、秀吉の天下統一後、次の天下人はという話題で、秀吉が真っ先に官兵衛の名を上げ、彼を恐れたことは有名な話。隠居時に起きた関ヶ原の合戦では、長期戦になると読み、九州一円を平らげ天下を狙うべく動いたことは、彼の人生に彩を添える。表舞台で生きることには価値を感じず、裏で支え、周りを動かすことに楽しみを見出す生き方に共感を覚える。

その人物が、そこで何を考え、どう判断したのか、空間を同じくして感じてみたい。その思いが強まった時、播磨国、現兵庫県姫路市に

行くことは、ほぼ確定。後は、どこまで情報を集められるかが、最後の鍵になる。

旅情報収集

起きた歴史は知っているけど、その場所がどこになるのか、全く分からず。ただ姫路に行っても、時間だけが過ぎるのは、容易に想像できる。情報を集め、事前に計画を立てる、これが短期旅行に必要なこと。ここで情報がなげりゃ、旅に行くのも厳しいなどの思いも強く。

ただ、黒田官兵衛情報は、世間にはちっともなし。いろんな本屋に立ち寄るも、ガイドブックの姫路市情報は、姫路城の一点張り。同県内にある、神戸という魅力的な地が、姫路の紹介を後回しにしている感もある。まず本屋に置いてあるような本からは、官兵衛情報を得られないことを確信、ネットで情報を探すことに。特に官兵衛を推す必要もないのか、姫路市HPに官兵衛史跡巡りなど観光プランはもろんない。これはまずいと、ここから真剣に情報を探す。

そして、ようやく見つけたのが、神戸新聞総合出版センター発行雑誌「バンガル2003年秋号」の黒田官兵衛特集。なにやらネットで注文できることを知り、700円と送料を支払い注文。そして、この雑誌が、この旅を最終的に決意させ、その後旅のバイブルとして、縦横無尽の活躍をすることになる。

どの本にもなかった、官兵衛のルーツ情報や、合戦跡・城跡情報が、地図と解説を加えて詳しく載っていて。初日の観光は、姫路市ガイドブックで、翌日の官兵衛史跡巡りは、この雑誌が大いに活用したところ。

宿・旅行日決定

いつものように、ネットで検索。じゃらんネットを利用して、お一人様利用歓迎の旅館を見つける。空室状況から旅行日を決定、誕生日となる7月28日（金）出発の1泊2日を基本とする。今後計画次第で、2泊目を姫路駅近くのビジネスホテルでとることを考えるも、結局1泊旅行とし、旅館だけの利用となる。この辺は、塩田温泉編で詳しく書いているから、ちょっと省略。

旅計画

いつものように、ファミレスに3時間滞在し、作成。とにかく行きたい場所をあげ、時間を想定しながら、ぎりぎり可能な線で詰め込んだ計画。1日目は、だいたい場所が固まっているから、基本的に徒歩とバスを利用する予定。2日目は、それぞれ目的地が離れているから、レンタカーを使用し効率的にまわり、ついでに電車でののんびり移動も味わいたいなど、無理に旅に組み込もうと考える。

旅準備

とにかく、登山も含め、歩き回る旅になりそうだから、スニーカータイプウォーキングシューズを旅前に購入。疲労から、足が痛くなったり、腰が痛くなったりと、自由な移動に支障をきたしたこれまでの経験を踏まえ。

ついでに、旅を前にもう一つ不安要素が生じる。旅4日前に、巻き爪の治療で、左足親指の爪右端を切り取ったこと。痛みは取れたけど、どうも長時間の歩きに不安がある。温泉宿に泊るのに、お風呂に入れ

ないんじゃないかというのも、気になるとこ。

準備は、毎度のことで、そろそろやばいと焦りだす前日から。最小限の荷物でと、着替えを入れたバックパックと、ガイドブックを詰めた手提げバッグを用意。移動中に読もうと本を3冊、いつもの旅が、ここから始まる。

(2) 姫路市観光

山口出発

様々な事情により、1泊2日と当初予定の日程を1日削った今回の旅。詰め込めば行きたいところを十分網羅できるはず、その自信が決断の理由。となれば、すべきことは、より効率的に、最大限時間を有効に使うこと。これまでのような、休憩がてらの読書タイムや、のんびりとといった時間をなるべく減らすことを心がけつつ、まずは早朝の新幹線に乗り、姫路へ向かう。

6時20分と、予定通りに家を出て、新山口駅7時8分の新幹線に乗る。姫路駅まで、1時間40分の短い移動。乗って早々、朝食として駅で買ったおむすび弁当を食べ、新聞を読みつつ時間を過ごす。ガイドブックをざっと読み返し、到着後の計画を考えつつ、あっという間の移動を終え、8時50分に姫路駅に到着する。

姫路到着

姫路到着後、まず向かったのが、駅北口にある観光案内所。その存在をガイドブックで知っていたから、まずはここでしか手に入らないだろう、地元情報を集めようと向かったもの。営業時間の9時まで、案内所の前で数分待機。既に先客が一人待っていたから、後ろに控えて、順番を待つ。

この二番手だったのが、一つの運。最初の人のはかなりの姫路通らしく、その場でレンタサイクルの手続きを開始。そういやガイドブックで、姫路の街は高低がほとんどないから、自転車移動が便利と書いてあったなと思い出す。こんなところがレンタル所になっているとは知らなかったと、さっそく便乗。利用時間は、18時まで。料金、無料。このおかげで、それからの姫路観光を思いっきり楽しむこととなる。

姫路城

まず、目指すは姫路城。着替え一式の入ったバックパックを駅のロッカーに預け、手提げバッグを持つての移動。

この日の天気は、まさに晴天。山口の梅雨明けは、遅れに遅れて2日前。出発前の天気予報じゃ、姫路の天気は2日共曇り。半ば諦め出かけただけに、この真っ青な空が嬉しくて。駅から城までは、800m程度のちょっとした道のり。この距離を軽快に自転車で動けたのは、本当に助かったこと。いつも、最初に張り切りすぎて、中頃には体力を失い、結局目指したとこにいけないことが多い。移動に、極力体力を使わずにすみ、自転車の恩恵を思う。



幅の広い歩道が両側に備わり、自転車の移動もスムーズ。赤信号を利用して、横断歩道の真ん中から、姫路城を見据える。

「姫路城とは」

城郭全体が残る木造建築物群として世界でも類を見ず、平成5年に世界文化遺産に登録されたことで有名。現姫路城の場所に最初に城が建てられたのは、1346年播磨を支配下に置いた赤松一族による。その後、羽柴秀吉がその城の主となった時期もある。現在の城が建てられたのは、1609年池田輝政が大名として城に入ってからのこと。8年の歳月を要したというのは、その規模を見れば納得するところ。城内は建てられた当時のままに保存されており、天守閣等国宝に指定されたものも多い。戦国大名としての備えが十二分に発揮された造りが残っており、現在ではここでしか見られないものもある。

城内への入口となる桜門を通り、9時30分に入場口に到着。ここで自転車をおり、入場料600円を払ってお城の中へ。まず菱の門をくぐり、観覧順に沿って、先に進む。



左：道路と城の境となる、内堀。防御を意識した堀の大きさを見てとれる。

右：料金所の先にある菱の門。これが城郭への入口となる。

西の丸

豊臣秀頼に嫁いだ2代目将軍徳川秀忠の長女千姫が、大阪城落城の後、本多忠刻に再嫁して過ごした場所が、姫路城西の丸。焼け落ちる大阪城の中、なんとしても救い出せとの家康の命で、成し得たのが忠刻と言われるが、真相は不明なんだとか。千姫のために建てられた壮大な建物は、本丸に次ぐ、見所の一つとなる。



左：西の丸前庭から見える天守閣。その美しい景色に、千姫への扱いの大きさを感じる。

右：百間廊下と言われる長い廊下の片側に、6畳程度の部屋がいくつもついている。部屋にトイレなども付き、側の者が生活していた場所なんだとか。長い廊下は、一つの見所でもある。

戦国大名が、その叡智を結集して造り上げたのが、この城。様々な防御の手段がこじられていて、見るだけでわくわくしてくる。さて、自分ならこの城をどう攻略しようかなと想像しながらぶらぶら歩いて。



左：はの門。だんだん道幅が狭くなり、一度に多くの敵が進めないようになっている。天守閣をバックにした景色がいい。

右：ほの門。本丸へと続くこの門は、大きさが極端に小さい。人一人かがみながらようやく通れる造りに感心する。



籠城のための備蓄庫である塩櫓と、内庭からの見る天守閣。



天守閣から見える、南西の景色。さて、この方面から敵が攻めてきたら、どう対応すべきかなんて、平地の中の小高い丘にある姫路城を居城としていた官兵衛の思いを考えつつ、景色を楽しむ。



城郭出入口となる菱門からの本丸全景。この自転車でうろうろと。

姫路城界限散策

自転車だからできること、少々の距離を気にせず、自由に動き回れる。このおかげで、この日の行動範囲は大幅拡大。時間も短縮できたから、予定に入れてた場所をほぼ網羅することに。

姫路市立美術館

姫路城東にあり、明治時代に建てられた旧陸軍の倉庫だった赤レンガ造りの建物を利用した美術館。城門から、自転車で5分程掘づたいに行ったところにあり、ひと際目立つ建物に、迷うことなく到着。城を背景としたレトロな建物は、なかなかいい雰囲気です。

せっかくだからと、入館料200円を払って絵画を鑑賞。近代フランス絵画としてモネからマティスまでという企画展。カミーユ・コローなんて人の湖って作品は、なかなか良いななんて思いつつ。



市立美術館外観。城をバックにした、赤レンガのレトロな建物は、ただ眺めているだけでも楽しめて。

姫路県立歴史博物館

市立美術館から自転車でさらに北へ3分ほど、午前中最後の観光地に選んだ歴史博物館に足を伸ばす。どうしても姫路城を中心とした江戸期以降の華やかな歴史ばかりが扱われる姫路市で、博物館ともなれば自分の求める戦国期の姫路の歴史を見られるのではと、ちょっと期待を抱いての訪問。さっそく入館、そして、館内入口の受付のおねえさんに教えてもらった事実には愕然。今後建物の改装が行われるため、現在展示しているものは何もないということ。

せっかく来たからと、とりあえず城がきれいに見られるという館内の展望台から景色を鑑賞。この後の予定は、昼食。ガイドブックにいまいちおいしそうなお店の店が載ってなかったことから、感じのよかった受付のおねえさんに聞いてみようと、受付に立ち寄りお話し。この辺でおいしいランチの店ありますか？とガイドブックの地図を開いて聞いてみると、周りにいた掃除のおばちゃん達も集まり、皆で検討。駅近くにある無国籍料理の店はよく利用するなんて情報を聞きつつ、途中通りかかった職員のおじさんに他の人が声をかける。なにやらグルメな方らしく、少し高いがこの辺りなら「トキ」というフランス料理の店が抜群に美味しいと自信の言葉をいただく。聞けば、ランチで1500円程度。全然許容範囲、そこに行ってみますと感謝しながら皆と別れる。

とにかく、知らない土地っていうのは情報がない。どうせならおいしい店だと思うが、雑誌情報は経験からどこまで信用できるかは疑問。それでも、地元の料理や伝統の店なら行ってみたいと思うけど、そういう店がない時は本当に毎度迷うもので。大概適当に見かけた店で食

べて、ちゃんと調べとけばと後悔するものだけど、今回は確かな口コミを仕入れることができて、大満足。いい方と出会えてよかったなと思ったもので。



県立歴史博物館建物と、館内のビューポイントからの一枚

ランチ

紹介してもらった「レストラン TOKI」は、市立美術館から南へ100m程行った道路の東側にある姫路カトリック教会内のお店。レストランウエディングもしているというフレンチの店で、ランチは、ブチオードブル、スープ、本日のおすすめの一皿、シャーベット、コーヒーが付くスペシャルランチ（1500円）に、産地直送の魚料理又は本日の肉料理を選ぶわくわくランチ（2100円）、フルコースランチ（3675円）の3種類。

わくわくランチのメイン・子羊の香草焼にかなり引かれるも、夕食を考えちょっと抑えめでいこうと、スペシャルランチを選択。そら豆の冷製スープにしる、オードブルにしる、どれも一工夫があっ

しくいただく。メインの鶏肉のソテーも、オリジナルソースとよくあい、満足。ちょっとおしゃれなフレンチをいただいたわけで。

期待した以上の味はもちろん、ウェイターもいい味を出していて勉強になったもの。一品ごとに銀ボールの蓋で料理を覆ってテーブルまで運び、トレトレボーンの掛け声と共に目の前に料理が披露されるという軽いイベントつき。こういうサービスは初めてだったから、なんとも新鮮で。食事の途中で、ハンドベルの演奏があったり、姫路を訪れた際にはぜひおすすめしたいお店となる。



補強工事中の教会の1階が、レストラン。メインの鶏肉のソテーを。

姫路文学館

昼食の間に、これからの予定を整理。姫路城と並ぶ初日の大きな目的地は、書写山円教寺。ここは、姫路城から8km近く離れているから、駅からバスで行こうと考える。姫路駅と宿泊地の中間点でもあり、円教寺を最後の観光地とし、その後宿へ向かう計画とする。駅から円教寺までの時間を考え、計画段階じゃ14時過ぎのバスに乗ろうと考えていたけど、自由に動ける自転車を手に入れたことで予定を変更。

姫路城境界で興味があるところをできるだけまわり、15時頃に駅に戻ることにし、行動を開始。

まず最初に向かったのは、姫路文学館。真夏の暑い太陽が降り注ぐ中、姫路城大手門から西へ800m程度の道のりを、汗をかきつつ自転車で向かう。この文学館は、どうしても行きたかった場所。その理由の前に、まずは簡単な文学館の説明から。

「姫路文学館とは」

播磨ゆかりの文人を一堂に会した文学館で、建物自体も姫路城をデザインに取り入れた、建築家安藤忠雄の設計によるもの。館内の展示物だけでなく、建物自体の持つ雰囲気を楽しめるのも、この魅力。遠くに見える姫路城の天守閣も、建物を彩るいい景色になっている。



左：姫路文学館の建物。北館と南館の二つからなる。

右：北館の屋上にある展望台から、姫路城を含めた街の景色を堪能。

姫路文学館に滞在したのは、40分。建物自体も周りを歩きつつ見て回ったが、そちらは10分程度。残りは、ただ一つの展示室で過ご

す。そこそが、この文学館訪問の目的である、司馬遼太郎記念室。歴史小説家である司馬遼太郎の作品は、日本史の知識に深みを与え、人間の生き方を学ばせてくれた、どれもが座右の一冊となり得る愛着のあるものばかり。この姫路旅行を始め、彼の本に出てくる人物に引かれ、何度とその地を訪れていることも、その影響を表す一つ。その司馬遼太郎の先祖が姫路で暮らしていたことと、戦国時代の姫路を紹介した「播磨灘物語」を書いた縁で、この文学館に一室が設けられているという。

記念室には、播磨灘物語の直筆原稿を始め、司馬遼太郎縁の作品が多く展示されていて、ただ眺めるだけで心満たされる至福の時を過ごす。自分が読んできた作品の直筆原稿を見たり、作品が連載されていた当時の新聞や作品を書き終えた時の感想文を読んだり、自分の知らない司馬遼太郎の一面に出会え、思った以上に楽しめ満足する。



左：南館の一室・司馬遼太郎記念室へ。ここには、この作品は姫路にあるのがいいと寄贈された、播磨灘物語の直筆原稿がある。

右：黒田官兵衛の肖像画。牢生活で足を悪くさせた後の晩年の姿。

名古屋霊苑

姫路城を見晴しのいいところで見たい、そんな思いで向かったのが、姫路十景に選ばれている名古屋霊苑。姫路城から西北へ1 km超。こうなったらとことん自転車で移動と道路看板を目印に国道2号線を西へ走る。途中から自転車をおり、手で押し着いた高台の頂上にある展望台から、姫路の街並みと城を鑑賞。ちょっと離れすぎて思ったほど城がきれいに見えないのが残念だったけど、ここまで来たっていう達成感で、妙に満足する。

ちなみに、その名称の通りここは霊苑。普通のお墓もたくさんあるけど、インドのネール元首相から贈られた仏舎利を奉納しているドーム型の仏舎利塔はシンボルとしてこの霊苑を彩っていて、見もの。ちょうどここに着く直前から通り雨が振り出して、10分程休憩所でジュースを飲みつつ、体を休める。あつという間に、雨が上がったから、時間もないしとさっさと次に移動を開始する。



姫路城西御屋敷跡庭園 好古園

時計も14時30分を回り、もうそろそろ駅に向かわねばと思うも、

その土地の武家屋敷を訪ねたいとの思いから、悔いは残すまじと好古園に立ち寄る。姫路城のすぐ西隣、元姫路藩主の下屋敷があった場所にあり、池泉回遊式の立派な日本庭園を見ることができる。

屋敷門から建物内に入り、潮音齋（ちょうおんさい）という庭を一望できる建物から、しばし景色を堪能。屋敷の庭を一回りし、さらに庭園内を歩き回っていると、抹茶を出すという茶室を見つけ、一休憩。双樹庵と名の付く茶室は、裏千家家元の設計・監修により京都の数奇屋大工が建てたという本格的なもの。入口でお茶代500円を払い、庭を眺めつつ、抹茶と和菓子の贅沢なひと時を過ごす。



左：入園料300円は、この玄関で支払い。



右：姫山原生林を背景とし瀬戸内海をイメージした、メインの庭園。



左：約1000坪あるという庭園は、広大。屋敷の庭とは違う、白壁の通りもあり、その一角に純和風建物の茶室がある。

右：襖を挟み16畳の客間を一人独占。そこからの庭の景色がまたよくて。心満たされるひと時を過ごす。

書写山円教寺

好古園には、30分ほど滞在、姫路駅前のレンタサイクル駐輪場に15時10分に自転車を戻す。レンタサイクル受付所となる観光案内所に鍵を返して、ついでにこの後の予定について相談。まず、書写山円教寺への行き方を聞き、バス乗場を教えてもらう。ついでに、円教寺から宿となる塩田温泉の行き方を相談。円教寺からタクシーで行こうと思うけど、どれくらいお金がかかりますか？と聞くと、円教寺近くから塩田温泉行きのバスがあるよとアドバイスを受ける。円教寺行きとはバス会社が違うからと、その案内所を教えられ、大助かり。まず、塩田温泉へ行くためのバスとなる神姫バスで該当バス停の場所、時刻を教えてもらう。そして、円教寺に行くための市バス乗場に行き、バスを待って乗り込む。

「書写山円教寺とは」

天台宗三大道場の一つとされ、静かな山間に重要文化財などの堂宇や仏像が点在している。966年に性空上人によって開かれ、西国巡礼27番札所として知られている。映画の撮影にも多く使われ、ラストサムライのロケ地として名高い。

姫路駅前から、バスに揺られて約30分で到着。書写山とは、姫路城の北西にある立派な山。その山の山頂の約31haという広大な敷地に広がっているのが、円教寺の境内。登山ルートから歩いて登れるらしいが、もちろんそんな時間も体力もなく、ロープウェイを選択。ロープウェイ山麓駅でバスを降り、そこで往復900円のチケットを買い、片道4分のロープウェイに乗り山上駅まで向かう。



左：ロープウェイの線が伸びた先が、書写山の山頂。円教寺の境内が広がる。

右：中腹からの姫路市街景色。姫路城から10km程度、意外と近いところにある。

山頂駅に到着したのが、16時22分。円教寺に来たのは、ここが観光名所だってこと以上に、強い思い入れがあったから。

「歴史」

織田信長が京都を押さえ、勢力を拡大させていった時期、信長を中部を中心とした地方の一勢力と捉えられていた全国の大名の考え方が変わり始める。信長に優る圧倒的な軍事力を持つ上杉謙信や武田信

玄は、倒す必要のある勢力と認識し、徐々に手を打ち始める一方、天才毛利元就から代が変わった毛利家は、中国地方一帯の領土を守ることを第一に考え、織田信長の勢力が自身の領土に及ぶことを避ける手段を取り始める。毛利家は、勢力の東端・備前（岡山県）を確実なものとし、さらに織田家の勢力が及んでいない播磨（兵庫県）を抑えようと、播磨の諸大名を傘下に入れるべく、交渉を活発化させる。

播磨国の諸大名が毛利氏になびく中、この先天下を治めるのは織田信長だと見、主人に代わり織田氏との交渉を行ったのが、黒田官兵衛。当時、御着城城主だった小寺氏の一番家老で、御着城より5km程度西の姫路城を主城としていた時期。毛利氏側についても将来織田氏に潰されると先を読み、危険を覚悟で織田氏に付くことを決断。徐々に強まる毛利勢の圧力に対抗し、播磨の国を毛利勢から守るため、織田信長に毛利攻めを敢行させる。

中国毛利攻めの一段階として、播磨（兵庫県）全域を織田氏の勢力とするため、播磨諸大名への攻略担当に当てられたのが、豊臣秀吉。黒田官兵衛が、秀吉の播磨入りに際ししたことは、彼の一端を表す姿勢。自身の城である姫路城を手放し、他家の武将である秀吉に譲ったのである。播磨攻略の拠点にする場所が必要だと、自分はさらに南に位置する隠居した父親がいる国分山城へと移り住む。大きな目的のためなら、小さな事にとらわれない、自分の城さえ手放すという行動に、彼の価値観を垣間見る。

加古川調停で、秀吉は、播磨国の諸大名を集め織田側に付くように説得を行う。しかし、毛利氏優勢との見方が強かったことから、多くの大名と決裂、戦争が始まる。反織田勢力の中心だった三木氏の居城

である三木城に大勢力が集結。そこから始まったのが、秀吉を中心とした織田勢力による三木攻め。一切の補給を断ち、干しに干しあげたと言われる兵糧攻めが、三木攻略のため秀吉が取った戦略。純粋な戦いによらない、当時極めて異色な戦法も、無駄な血を流すという戦いを好まない秀吉らしく、この後彼が愛用する戦略の先駆けとなったものと言われている。一方、兵糧攻めにより、武士らしい戦いの機会を与えられず、飢え死にする者を多く出した三木側には、多くの不満を残したようだが。

で、ここからが、ようやく円教寺に関わる話。三木攻めを決めた秀吉は、戦いに備えるため姫路城から本陣を移すことを決め、移った先が、この書写山の円教寺というわけ。寺の僧を皆追い出し、居座ったという。なぜ、この円教寺を拠点にしたのか、これはその場で感じなきゃ分からない。それが、ここを姫路城と並ぶ目的地とした理由。

なぜ、ここを三木城攻めの本拠地としたのか、これを知ろうと受付にいた坊さんに質問。もしかしたら追い出されたことに未だ恨みを持ってちゃまずいと、慎重に尋ねたものの、そういえば、そんな話を聞いたことがあるなんて程度で、どうもその辺の詳しいことを知っている人が誰もいない様子。映画ロケ地なんてことはどうでもいいから、ここが刻んできた歴史を教えてもらえたらと思うんだけど。

ちなみに、ここで新たな事実が発覚。寺の拝観時間は、17時までと残り40分弱。急がないと、皆閉まると教えられる。参道は800m近くの緩やかな登り道と結構な距離。これはまずいと、大急ぎの観光が、ここから始まる。

せめて、本堂くらいはと、せっせと参道を移動、小走りを織り交ぜ、紹介されている目安時間20分を大きく短縮、約10分で到着する。

摩尼殿

山頂にある珍しいお寺ってだけが、人をひきつける理由じゃない。人の世界と隔離され、山という自然が醸し出す神秘的な雰囲気に含まれる中にそびえたつ立派な建物に、厳かな気持ちのみならず、心の内面から感じられる凜とした空気を楽しむことができる。

書写山のシンボリックな建物でもある摩尼殿は、その雰囲気を最も味わえる建物の一つで、本尊を納めるために京都の清水寺と同じ懸造という建築様式を用いて建てられ、後ろの崖を削り、前面に高い脚を組み舞台付きに仕上げられている。見る者を圧倒する建物で、ここだけでも大きな満足を得ることができる。

あらゆる円教寺の紹介欄に使われているのが、摩尼殿の写真。ここだけはなんとしても見なきゃと、山頂駅から急いできたもの。山の中にそびえる、厳格な建物に、期待以上の気持ちを感じることができ、大なる満足を得る。秋には、舞台から境内に広がるきれいな紅葉を見ることができるんだとか。

摩尼殿に到着したのが、16時40分頃。参拝していると、明かりが落とされ、段々と閉館モードに。夕方の務めなのか、読経が始まり、ますますいい雰囲気になっていく様子を堪能する。ただ、お守り販売等併設された売場の受付の坊さんが、売上のお金を数えている姿には、ちょっと辟易。一心不乱に札束を数える姿に。まあ、現実だろうけど、もうちょっと達観した存在であってほしいなど。

ここが閉まるとなると、他の建物も時間の問題。これは本格的に急がねばと、移動を開始。摩尼殿の裏道を抜けた後、再び山道のような参道を急ぎ足で移動する。

摩尼殿から5分も行ったところで目の前が開け、三之堂と呼ばれる三つの堂が集まる広い境内に出る。ここは、円教寺の中核を成す伽藍で、常行堂・大講堂・食堂からなり、食堂では、弁慶が使ったとされる文机や、柱に秀吉の家来の落書きがあるそう。ちなみに、到着時には、既に食堂の入場時間は終わり見ることができず、唯一大講堂の扉を閉めている坊さんに待ったをかけ、中を少しだけ覗かせてもらっただけで。



摩尼殿を崖の下から見上げる、最も美しい姿。



舞台からの景色。積み重ねた歴史が発する厳格さを。



三つの建物が境内を囲むようにコの字型に位置する、三之堂。

旅の魅力を実感するのは、人との出会い。一人旅をしていて、いつも思うのは、その機会が格段に増えること。いつも以上に鋭敏に、常に外向きに感覚を向けているからこそ、気付くことがある。そして、今回も、そんな出会いに恵まれる。

三之堂に着いた時、唯一そこにいたのは、サングラスをした外国人の青年。大講堂の写真を撮ろうと、カメラを構えているところだった。持つ雰囲気から相手の人間性を見抜くことには、密かな自信。ああ、いい雰囲気持った奴だな、とちょっと興味。とりあえず写真を撮ってもらおうと、お願いすると快く受けしてもらい、大講堂をバックに一枚。ただ、この時は、時間もないしとその後は一人で建物を見て回る。

唯一扉が開き、外から中を見ることができた大講堂が閉まりだしたのは、その数分後。もう閉まるんですか？と作業中の坊さんに確認し、ちょっと見させてくださいねと一部の扉を閉めるのを後回しにしてもらい、中を見学。そこで、近くにいたこの外国人に声をかける。もう閉まるらしいけど、この中見た？と尋ね、見てないって言うから、それじゃ急いで見なよとすすめる。ついでに坊さんに、この辺りで景色を見られるいい場所はないですかと尋ねると、この建物の裏に展望台があると教えてもらう。この情報も教えてあげようと、向うにビューポイントがあるらしいよと話をする。

場所がよく分からないとこに連れて行き、迷うのもどうかと思い、一人先に展望台を確認。再び三之堂に戻っていると、その彼がこっちに来ていたから、そのまま展望台まで案内することに。そこからいろいろ話をしてね。

彼の名前は、ギャレス。歳は27、ニュージーランド生まれで1年前に来日、大阪で英語の教師をしているんだとか。相変わらず適当な英語で話をしていたけど、英語の教師と聞いて恐縮。「どこで英語勉強してるの？うまいね」なんてほめ言葉に嬉しさを感じつつも、らしい発音と勢いで誤魔化し、文法、表現のバラエティの幅の狭さは自覚しているところだから、適度に謙遜。もうちょっと勉強しようとは思ってるけど、なんて話をしつつ。

姫路には、日帰りで旅行に来たそう。鈍行でも数時間とかなり近いらしく、こっちは山口県在住で、早朝から出向いているよと説明する。大阪の家賃を聞いたのは、引越を決めた時期だったこともあり。やっぱり日本は、物価が高いよと嘆いていた。山口県の魅力や自分の仕事についても話をし、ニュージーランドについても、教えてもらう。細長い島とはイメージがあるけど、彼が住んでいるところは、1時間もあれば東西を行き来できるらしい。サーフィンってイメージがあるけどと聞いてみたら、自分ではできないけどね、だって。

展望台に向け歩き始めてから、ロープウェイでおり、バス乗場が違うため別れるまでの約1時間。ずっと一緒に過ごして、いろいろ話をすることに。この厳かな雰囲気は、日本ならではの魅力だと日本の良さをアピール。摩尼殿についたところで、一休憩。自販機でジュースを買い、ベンチに座ってメールアドレスを交換。ウェブページも作っているからと、このアドレスも教えて。デジカメで撮った写真を見せ合いつつ、ここが良かったよと姫路市内の観光地を紹介。近くにいたおばちゃんに、二人での写真を撮ってもらい、メールで送るよと伝える。最終ロープウェイの時間は、18時。それに間に合うようにと、

再び乗場に向かって歩き出す。

参道には、灯籠や地蔵が並んでいて、それを見つつ、日本では家単位で寄付 (donate) する習慣があるんだろ、と質問を受ける。こりゃ、日本の家制度を教えねばといろいろ話すも、いつものようにボキャ不足で、なんとなくしか伝わってないだろうな。日本語でなんて言うんだというから、「キフ」だなんて教えて。ちなみに、この寄付という制度を伝えたくても英語が思いつかずにとこ、彼が携帯電話の英和辞典で示したことから、これこれと話しが弾んで、こんなレベルであったりする。

少し早めに着いたから、17時45分の最終一つ前のロープウェイで下山。最初に乗って先に席に座っていたところ、後からおばちゃん達が乗ってき、そこですかさず席を譲る一瞬の躊躇もない彼の姿に、これが外国人に毎度感心させられる姿だと思出す。おばちゃん達にどうぞっていうと、私達はここで働いている職員だからいいよと言われて。海外旅行経験者にとって、分からない現地の言葉で楽しく会話されると、どこか疎外感を感じるもの。その嫌さは十分分かっているから、おばちゃん達と話しつつも、こんなこと言ってるよとかなり意識し伝えたりしつつ。すっかり観光客も減ってね、なんて雑談は、さすがによろ伝えきれなかったけど。

今この寺では、小学校の林間学校が行われているらしく、ロープウェイ乗場でいろんな人に先生ですか？と聞かれる。行きの寺の入場料支払い所でも聞かれたな。こりゃ、領けば無料で入れたなど、今さらながら思いもする。明らかな旅人空気を出しているつもりも、どうや

ら自分だけの思いのよう。まあ、先生に間違えられて悪い気はしないけど。

ここから、今日泊る塩田温泉に向かうからと、バス乗場でお別れ。その場限りとは、思う。それでも、普段なら絶対お互い出会うことがなかっただろう、気の合う人と関係がもてるのが、旅の魅力の一つ。あらためて実感し、その楽しく過ごせた時間に感謝する。



展望台から見下ろす、姫路市の景色。



三之堂へ続く参道。そして、摩尼殿の前で、ギャレスと。

宿泊地・塩川温泉へ

ロープウェイを下り、お互い乗るバスが違うから、ここでギャレスとお別れ。次の目的地は、今日の宿泊先塩田温泉。塩田温泉行きのバスの時刻は、18時30分。出発まで30分ある待ち時間をどう潰そうかと考えつつ、しばしロープウェイ待合所の椅子に座って読書タイム。

ところが、座って数分で方針転換。山の麓に位置する場所柄、絶え間ない藪蚊の攻撃が始まり、とても耐える自信をなくしたため。だいたいバスの場所は聞いているけど、まずはしっかり確認しておこうと、バス停を目指し歩き出す。ロープウェイ乗場から南へ500m程行くと、道沿いにお店が点在し始め、ちょっとした商業地に出る。そこに、神姫バス・横関バス停をすぐに発見。まだまだ時間があるなど、次の目的に向け行動開始。

宿に着くまでに用意しておきたかったこと。それは、治療中の足の指を水につけないよう足首を包むためのビニール袋を手に入れること。しばらく歩いてもどこにも見当たらないコンビニ、スーパーに、半ば諦め。こうなったら、さっき見かけた花屋のおばちゃんに頼み込んで、ビニール袋を一枚もらおうかと最終手段を考えつつ歩いていると、「ヨコゼキドラッグ」という小さな薬局を発見。なにやら生活雑貨も扱ってそうだし、ここなら間違いないと、喜び勇んで店内に入る。

ビニール袋はすぐに見つかり、100枚入りを1袋購入。で、時間を見ると18時10分。1日炎天下の中を動き回りすっかり疲れ切っていたため、この涼しいクーラーの中で休もうと、薬局のおばちゃん

に、バスが来るまでここで休憩させてとお願いし、椅子を借りてひと休み。ここから10分程、来客もなく暇そうなおばちゃんといろいろお話。

最近の円教寺観光客の状況を聞き、すっかり減ってるねと現状を教えてもらう。歩いて登っても30分程度だし、登山をするとなかなかいいよと魅力を聞く。ラストサムライの撮影時は、人も集まり盛り上がったという話を聞きつつ、トムクルーズは、ヘリコプターで直接寺に行ったから見ることがなかったという裏話も。

姫路に来て思ったことは、言葉のアクセントが関西弁に近いということ。兵庫県なんて、中国地方の一部と解し、道州制の際には取り込んでやろうと思っていたのに、こりゃ文化圏が違うなど、言葉の壁を大きく感じて。そんな思いを伝えたところ、姫路は関西弁じゃなくて播州弁っていうんよと教えてもらう。ちょっと感じが違うでしょと言われても、もちろんさっぱり分からないが。なにやら、関西弁より言葉がきついんだとか。山口県には、津和野に行ったことがあるっていうから、それは島根県だと軽く訂正。あの辺は、萩と一緒にツアーに組み込まれているからとフォローをしつつ。

そろそろバスの時間だからと、お礼を言いつつお店を後にする。こんなにのんびり世間話できるのも、旅の良さよね。こっちも話す話題が多いから、いろいろ世間話をしてしまい。ガードを薄くすること、これも旅には必要な要素かな。まあ、おばちゃんはほっといてもしっかりこっちのテリトリーに入ってきてくれるけど。

18時32分、塩田温泉行きのバスに乗り、いよいよ宿に向かうことに。

(3) 塩田温泉

宿泊地・塩田温泉

書写山円教寺から、バスで20分。宿近くの、塩田バス停に到着する。今回の宿は、じゃらんネットで予約したところ。お一人様歓迎という文字が、なによりも有難い。どうしても、夏の週末という繁忙期に、6畳一間に一人で泊ることは、ちょっと気兼ねするところがある。

今回、宿泊地を選ぶ際に考えたこと。誕生日旅行という裏目的から、宿には多めの予算を確保、なにより去年の新潟旅行で旅館に泊り、安さ重視で選ぶビジネスホテルにはない魅力に気付いたことも大きい。せめて1泊は旅館で心満たされる時をと思っていたから、旅館を条件に宿を探す。

宿の名前は、「上山旅館」。湯暦300年播磨唯一のいで湯「塩田温泉」の湯元で、お湯の質に定評があるらしい。塩田温泉が、姫路駅から50分程度で行けるということも、決め手の一つ。観光を犠牲にしてまで、宿泊地を選ぶ気はなく。じゃらんネットに書かれた利用者の評判の高さが、なによりの決め手。サービスはいいし、料理もおいしいという旅館としての要素を備え、その上姫路市から最も近い温泉地となれば、他に競合は見当たらず。宿の空き状況から、旅行日程を組む。夕食会席付きの宿泊プランは、12,600円からあったけど、今回選んだのは、15,900円の炭火焼会席プラン。姫路名産の但馬牛とアナゴの炭火焼が付くというもので、なにより自分の誕生日に祝杯を挙げるこの夜に、最高の時を過したいなど。

ネットで予約した時に登録したチェックイン時刻は、18時。で、

円教寺に着いたのは、16時過ぎ。バスでの移動を考えると、とても宿に18時に着くことは不可能と諦め、とりあえず電話を入れる。18時30分に横関バス停から神姫バスで宿に向かうから、着くのが遅くなると。

塩田バス停で下りると、車の迎えが来ていたことにはちょっと驚き。バスの時間を教えてもらっておくと迎えに来られるんだけどと言われつつ、そういやちょうど伝えていたなど。塩田バス停から、山方面へ300m程度、そう遠くないけど、疲れた体でこの坂道を歩かなくていいと思うと、迎えの有難さを感じ。



左：上山旅館外観



右：宿泊部屋。泊った部屋は旧館で、明治時代に建てられたものとなり、かなり趣のある部屋。床柱の深みのある色といい、旧館を指定して宿泊する客もいるという理由に納得。積み重ねた年数だからこそ成せる味わいを楽しむ。

19時前に宿の部屋に入り、夕食を19時30分に依頼。まずはお風呂で一日の汗を流す。ちなみに、塩田温泉とは、名峰雪彦山を望む夢前川のほとりに湧く温泉郷。江戸時代に著された播磨鑑にも登場す

る古湯で、ナトリウム炭酸水素塩泉によるさらりとした湯ざわりを特徴とし、湯冷めしにくいから冷え症にいいと言われているとか。確かにさらりとしたお湯だなと思いつつ、ゆっくりとお湯に浸かり、疲れを癒す。



左：部屋へ向かう廊下。あんまりいい感じだから、一枚。



右：檜作りの内風呂。20時を境に男湯と女湯が入れ替わり、石風呂も味わえるよう。

夕食「炭火焼会席」

ついでに露天風呂もと思って時計を見ると、19時25分。のんびり浸かりすぎたようで、露天を諦め、夕食のために急いで部屋に戻ることに。19時30分過ぎ、予定通り迎えが来て、夕食所へ案内してもらう。部屋食じゃないのは、ちょっと残念だったけど、連れて行かれた場所が、個室だったのは、有難かったこと。なにせ、周りが盛り上がる中広間で一人ぽつんと食事するのは、なんとも居心地が悪いから。

飲物にビールを注文。29回目の誕生日を祝し、これまでの人生を

振り返りつつ、一人乾杯。溜まった疲労と湯上りの火照った体に、冷えたビールが沁み込み、至福のひと時を過ごす。

前菜スタート。鮪とはまちの刺身も新鮮でおいしく満足。海と山の幸をふんだんに盛り込んだ料理という噂どおり、種類も盛りだくさん。一品一品料理を運んでくれ、出来立てを食べられるのも嬉しいサービス。お酒は飲まないから、早めに料理を持ってきてもらっていいですよと伝え、次々と平らげていく。塩田温泉の湯を使った豆乳鍋は、絶品。栄養が多いから、スープはぜひ飲んでくださいと言われ、もちろんと。メインの但馬牛とアナゴの炭火焼を塩で味わうと、旨みも増幅、姫路いいこと思いつつ。その後、できたての天麩羅を食べた後、ご飯で締め。このご飯が、なんともいえない旨さで。米の甘みを感じられる、ふっくらご飯。腹いっぱいなのにと思いつつ、茶碗に2杯程いただく。あまりの感動に、ここの米はおいしいですねと伝えると、他のお客様からもそんな声をよく聞くということ。山間の地だから、寒暖の差もありそうだし、おいしい米ができるのかなと思いつつ。

ビールを1本飲み終わらないうちに、相変わらずすっかりほろ酔い。ふらふらしつつ部屋に戻り、再び風呂に入る力もなく、敷かれた布団でひと寝入り。やっぱり旅館の楽しみは、ここにある。おいしい料理、行き届いたサービス、落ち着いた空間。年間一度は味わうべきひと時だなどと思うところ。心が豊かになる、その感覚を自分の中に刻んでおくために。

ひと寝入り後、22時前、ちょっと落ち着いたところで、ロビーに

行き明日の姫路行きバスの時刻を確認する。1日十分に観光するためには、9時過ぎのバスで姫路に向かう必要があると判断。朝食時刻が8時20分からだというから、時間的には忙しいなと思いつつ、朝の予定を立てていく。効率的に動くためには、やはり計画。行きたい場所をピックアップし、だいたいの順番をイメージしたりしつつ、0時前に就寝する。



左：食事の部屋。一人でのんびり食事ができる環境に、感謝。



右：豆乳鍋の火入れ前



左：刺身一群



右：アナゴと但馬牛のメイン料理。炭火で焼いて、素材旨みを味わう。

朝のひと時

まずは朝食までに全て準備を済まさないかと、朝は早起き。まあ、旅先じゃ早く目が覚める方だけど、6時に起きて。やっぱり朝は散歩でしょ、と6時30分にフロントに行くと、誰一人おらず、入口も鍵が閉まったまま。こりゃ参ったと、ロビーの椅子で20分ほど休憩することに。ようやく入口があいて外に出、すがすがしい朝を満喫しつつ、散歩を開始。麓の町に下りるべきか、さらに山にのぼって行くべきかと一瞬悩み、まだ見ぬ山を目指して歩き始める。

アスファルトで舗装された道は歩きやすく、鳥のさえずりを聞きつつ、すずしい爽やかな朝を満喫する。ほととぎすの音色をこんなに堪能したのは、いつ振りやらと思いつつ。歩くこと25分、ちょっと頑張りすぎて町境まで到着。一山越そうかと考えるも、特に目標もなく歩いてきたため、無理をせずここで引き返すことにする。引き返す前に町境で見つけた山頂を示す案内板に、こりゃ登るべしと張り切るも、手付かずの荒れた山道を前に早々に諦める。くもの巣との格闘や蚊の襲撃までは耐えられても、待ち構える蜂を前にすると、今日一日を棒に振るリスクを犯してでも強行突破する気にはとてもならず。



左：歩きやすい、こんな道。隣町への近道らしく、戻る頃には通勤の

車をたくさん見かける。

右：散歩の途中で、塩田の町を見下ろす景色に遭遇して。

朝風呂

7時30分に宿に戻り、急いでお風呂へと向かう。朝風呂大好き、ここは譲れない一線。なにより、露天風呂に入らなきゃ、宿を満喫したとはいえない。宿の庭は、ちょっとした庭園になっていて、内風呂とは離れた位置にある露天風呂まで、浴衣を着て歩いて移動することになる。ちなみに、行ってみて分かったこと。どうやら、ここにあるのは、野天風呂だということ。自然の中のお風呂といった感じで、数日前に明けた梅雨の影響もあってか、風呂の底に砂がたまっているのは、普通の風呂に慣れた人には、ちと辛いかな。これなら普通に内風呂に入ってもいいなと思うも、せっかくだからと野天を味わう。



左：宿から下駄を履いて庭を歩き、小高い丘の上にある野天風呂へ。

右：ちなみにこれは、家族風呂。誰も予約が入ってないから、ご自由にといわれたけど、どうせならと広い野天を選択。



左：そしてこれが、野天風呂。底は土色だし、水には木の葉や昆虫が浮いていて。周りを飛ぶトンボは許せるが、蜂まで飛び回る姿には、さすがに参る。時期的な事情かもしれないけど、もうちょっと掃除したらいいのにと考えたもの。

右：こうやって、包帯を巻いた指を守るため、ビニール袋をして入浴。足をつけずに入浴することは、かなり至難。最後まで一人利用、このおかしな格好を見られずにすんでよかったよ。

朝食

風呂から上がって、出発の準備。なにせ、食事後すぐに宿を出る必要があるから。8時20分前に案内の電話を受け、夕食と同じ場所で朝食をとることに。

朝食は、ここの宿の売りの一つ。名物「温泉粥」という温泉の湯を使った塩気のある粥を食べさせてくれるというもの。おいしいご飯もしっかり味わい、朝から栄養をつけられて満足する。

出発

部屋で休む間もなく、出発の時。かなり急いだ朝食のままの勢いで、8時50分にチェックアウトをする。バスの時刻を伝えたところ、車でバス停まで送ってくれるということで、お言葉に甘えお願い。旅館の風情、サービス、温泉、料理、4拍子も5拍子も揃ったいい宿だったなと思いつつ。ただ寝るだけだから、という考えはどこかにある。でも、たまには自分のために、このサービスを味わう価値は大きいなと感じたもので。



左：いつものように、宿の前で一枚。



右：バス停前で。塩田の町を走る、幹線道路を。

(4) 史跡巡り

2日目スタート

宿泊地バス停塩田発9時過ぎのバスに乗り、再び姫路駅へ。夕暮れとはまた違う、緑に囲まれた景色を見ながらの移動を楽しみ、9時45分、姫路駅に到着する。コインロッカーに、着替えを入れているバックパックを預け、行動開始。午前中は、レンタカーを使い、郊外の目的地を目指す予定も、まずは、午後からの電車移動を考慮し、緑の窓口で時刻表を確認する。

電車での移動を考えるのは、新潟旅行で味をしめたことによる。のんびり電車で揺られながら、時に景色を見つつ、時にうとうと昼寝をし、時に本を読みながら過ごす2時間程度の移動は、なによりのいい思い出になったもの。レンタカーを借りながらも、あえて電車移動を加えようとするのは、そんな理由による。

電車移動の目的地は、三木城址のある三木市。姫路市から30km程度の道のりも、電車で行くには結構不便。姫路駅からJRで加古川駅に行き、そこから加古川線で戸神駅へ、ここで三木鉄道に乗り換え、終点の三木駅まで行くというもの。30分に1本という三木鉄道の影響もあり、乗り換え含め片道2時間近くかかる行程。観光時間を考えると、14時には姫路駅から三木に向かう必要がある。わざわざ電車を利用するために、行きたい場所を減らすのは、本末転倒ではどの思いがよぎるが、とりあえず、数本の乗り継ぎを含めた往復時刻表を書き留め、次の場所へと移動する。

まずは、昨日もいろいろお世話になった観光案内所のおばさんに、

レンタカー会社の場所を聞く。駅北側にニッポンレンタカー、南にトヨタとマツダレンタカーがあることを教えてもらい、さっそく近くのニッポンレンタカーを訪ねる。

とりあえず、電車利用の可能性を残すべく、6時間のレンタルで依頼。延長して12時間にしても500円の追加だからと、教えてもらう。問題は、車種。移動の手段に金をかける気はなく、まずは軽でとリクエスト。そして、もちろんナビ付きでと。ところが、ここからが問題、ニッポンレンタカーの規模によるものか、軽は出払ってない、ナビ付きはないと、どの条件も満たさず。それなら、他に行けばいいやと気楽な気分であったところ、そんな雰囲気を感じてか、小型車ヴィッツを軽の値段にするとの妥協案を受け、了承。初めての地でナビなしとは、いくらなんでも冒険じゃないかと思うも、地図を付けてもらうことで受け入れる。6時間レンタル料金5130円を払った後、目指す地への道順を教えてもらい、出発する。

広峰神社

まず向かった先は、姫路城から北へ5km程度、広峰山(311m)の山頂にある、広峰神社。姫路の後背に位置し、姫路市街を一望することができる好立地にある神社。ここは、黒田家と縁の深い地で、姫路との関わりが始まった場所とも言える。官兵衛の祖父が、備前福岡から播州に流れてきた際、ここで家伝の目薬を売って財を成し、家臣を抱えるようになる。後に官兵衛が武将として頭角を現すための礎の地と言うことができる。

姫路駅から、車で15分程で山頂の広峰神社横駐車場に到着。車を置いた後、歩いて鳥居をくぐり、神社に向かう。

実は、この神社、官兵衛のつながりだけじゃなく、神社としてもかなり格の高い、立派なものだったりする。奈良時代、遣唐使として、二度も中国に渡った吉備真備が、朝廷に願い出て祀ったのが始まりといわれる。また、京都・祇園の八坂神社は、平安時代、都を襲った疫病を治めようと、広峰神社の神を移したものとされる。現在の本殿は室町時代中期のもので、官兵衛も同じ社殿に詣でたんだと思いつつ。

広峰山の山頂は、その名の通り広い平地となっていて、鳥居をくぐってから広峰神社まで続く参道は、歩いて8分程度とその広さを十分実感できる、なかなかの距離。当時繁栄を極めた広峰神社の様子を想像しつつ、境内を散歩し、本殿へ参拝。姫路市を一望できるロケーションに、当時の官兵衛がそこで見、想像したであろう世界に思いを馳せる。姫山に建つ姫路城を中心に、どのように国を治めようと考えたのだろうかなど。



左：広峰神社入口。山頂にあることを忘れさせる立派な造りで、格式の高さを感じさせてくれる一面。

右：室町時代中期のもものとされる、本殿。かつて繰り広げられた、京

都・八坂神社との本家争いは、なかなか壮絶だったとか。

広峰神社から100m程山を下ったところに、広峰展望入口という看板を発見。やっぱり追い求めるは、地形を一望できる見晴しのいい景色。広峰神社からの景色も、違った意味で楽しめたが、それ以上のポイントを求めて、山の中に分け入っていく。

今回の旅で、最も恐れていたことは、蜂と格闘する破目に陥ること。2年前にスズメバチに襲われて以来、二度目の蜂はやばいって情報と、蜂はいつ襲ってくるか分からないというトラウマ的な事情により、とんと蜂に弱くなっていて。蜂も命懸けてんだから、めったなことじゃ襲うはずがない、と確信めいて蜂と共存していた頃が懐かしい。姿を見ただけで、常に警戒、落ち着きをなくす有様で。

ちなみに、初日から自然を楽しんでいるこの旅は、蜂と遭遇すること多数。塩田温泉行きの横関バス停では、ベンチを足長蜂が旋回していたため、回避。宿泊先上山旅館では、部屋に入った早々、見たこともない中規模の真っ黒な蜂と遭遇。とても自力で追い出す気力もなく、宿のおじさんにお任せ。虫取り網でさっとすくい取る方法に、ちょっと感心したり。朝の散歩で、山頂への登山を諦めたのも、原因は蜂だったりする。2、3の蜘蛛の巣を落ちていた枝で取り払い、この程度じゃへこたれんと思いを強くするも、目の前に現れたしっかりくびれた体を持つ蜂に、あっさり妥協。今日一日を懸けるような場面じゃない、と。宿自慢の野天風呂では、早朝から、トンボのみならず、元気よく飛び回る蜂とも一緒にお湯を楽しむことに。体を洗うどころか、お湯から出るタイミングさえつかめず、数分の時間ロスをしたもので。

恐れていたのは、遭遇機会が確実にある2日目。なにせ、山登りを予定していたから。よりによって、黒いTシャツを選択したことは、最後まで後悔。帽子も被らず、まさに蜂を刺激するには絶好の装いで。巣を襲い蜂蜜をむさぼる熊を天敵とする蜂には、その姿を攻撃するという、DNAに刻み込まれ、古より引き継いできた自己防衛本能があるらしい。蜂とは、黒い、動く物体に反応し、襲うものとは、田舎生活を送るものには、はや常識。今日の行動は、まさに、蜂を刺激するための格好で、彼らの住処に分け入ろうというもの。できることといえば、やられる前に、やるということだけ。無駄に刺激を与えず、襲われたら敏感に察知し、先制攻撃で叩き落すという、かなり原始的な手立てのみで。

そして、本日一発目の危機に、この展望台へ向かう過程で遭遇。さっと逃げて、事なきを得たが、その結果得た景色が、下の右写真の通り。いったい何のために頑張ったのやらと。



左：展望広場入口という看板を見つけ、危険を承知で山頂へ向かう。階段があるけど、人の往来が少ないようで、段々と荒れた状態に。

右：そして、着いた先の展望広場。木々が立派に成長し、下界の景色など何一つ見えず。いったい何のために・・・、と。



広峰展望広場入口の向かいには、ホテル。そこからの景色は、瀬戸内海まで見渡せる、姫路市内を一望できる求めていた景色だったから、その様子を、パノラマで。

御着城

広峰神社界隈に50分程滞在、バスの時刻を気にせず自由に異動できる車の便利さを実感しつつ、次なる目的地に向け、移動開始。目指す先は、御着城。まずは、御着城と官兵衛の関わりを、簡単に紹介。

「御着城」

1519年赤松氏の一族で西播磨最大の領主・小寺正隆が築き、本城としたもの。別所氏の三木城、三木氏の英賀城と並ぶ播磨三大城郭の一つに数えられ、姫路城・庄山城・国府山城を枝城に持ち、三代目城主小寺政職の出奔により落城するまで、約60年間続いた。

官兵衛と御着城のつながりは、祖父重隆の時代から。二代目城主則職が家督を継いだ時、則職に仕え政務を執っていたのが、祖父の重隆。

ここから、小寺氏と黒田氏のつながりが生まれ、祖父に続き重臣の位置にいた父職隆が、官兵衛の恵まれた才能を見抜き、早々に隠居、官兵衛は22歳で小寺家の重臣となる。

主人・小寺政職の筆頭家老として、多くの重臣が西の毛利につくことを求める中、官兵衛は一人反対、東の織田につくよう政職を説き伏せ、信長につくことを決定させた。政職の使いとしてすぐに岐阜城に出向き、信長に謁見。この席で信長に気に入られ、地方の一家老に過ぎない中、押し切（へしきり）の名刀を与えられたことは、官兵衛という人物に対する信長の大きな評価を知ることができる一つのエピソード。

信長の武将・荒木村重が、裏切りにより毛利氏につき、播磨にも毛利方の力が及んでくると状況が一変。主人である小寺政職は、密かに毛利方につくことを決め、官兵衛を切ることを決意する。荒木村重への説得のため有岡城に向かった官兵衛に対し、政職は、官兵衛の処分を頼む旨の書状を密使として村重に送る。捕われの身となった官兵衛は、有岡城が落城するまでの1年近くを城内の地下にある土牢に幽閉され過ごし、落城と共に救出されることとなる。

有岡城落城2ヵ月後、一転信長に攻められることとなった御着城の政職は、秀吉の降伏を勧める使者を、殺して拒絶。一万騎の軍勢に攻められ、二日間の激闘の末、政職は、城を開き逃亡。これにより、御着城は落城し、官兵衛は、信長に直属する秀吉の参謀として、新たな道を歩き始めることとなる。

御着城とは、黒田家が世に出るきっかけとなった地で、官兵衛にと

っては、まさに自分を懸けた場所。深く彼が関わったその地を踏みしめたくて、この地を訪れる。

ちなみに、この御着城は、地図に載ってないどころか、どうやら姫路在住の人にさえ知られていない様子。看板一つ出てなくて、ここにたどり着くまで辺りを何度さまよったことか。頼りにした本は、御着駅下車北東へ徒歩約10分という情報のみ。そしてようやく到着し分かったこと、現存するのは、道路沿いにある城跡と言うにもはばかれるようなモドキの代物のみ。ここで官兵衛が・・・、という想像を膨らませるためには、物理的な構造物はそこまで必要としないけど、あまりに目立たないその跡地に、なんともさみしさを感じたもので。



左：唯一らしい城跡を髯髯とさせる白壁と御着城跡と刻まれた石碑。
右：この国道二号線は、御着城の真ん中を割るように走っているとか。隣に大きな川が流れ、北側は山。前に広がる平野と、小寺氏の主城であったこの城の戦略的な意図を想像することができる。

昼食

ご覧の通り、御着城を見学したのは、周りをうろうろし役所出張所

を覗いた15分程度。時刻は、12時30分、ちょうど昼時だと思い、近くの店を探すことに。

いい店を見つければこだわるつもりはなかったけど、結局ガイドブックでチェックしていた近くの店を目指す。できれば、あなご井等姫路特産の料理を食べたかったけど、少ない情報の中じゃ見つけることができず、ガイドブックの中で、今日の観光ルート途中にあり、おいしそうな料理にひかれた店を選ぶ。

ガイドブックの地図を頼りに、何度か道に迷って、ようやく到着。幹線沿いからちょっと住宅街に入った、分かりにくい店。たかが4、5キロの道を30分かけ到着、それが、二日目の昼食に選んだ店「とろろ料理 倭風酔」。

その名の通り、とろろ料理を専門とする店で、メインとなる自然薯は、和歌山県有田の新宅さんから仕入れているといい、顔の見える素材を使用しているそう。米には、県産米を100%使用し、だしには、天然利尻昆布、天然羅臼昆布、天然日高昆布、ヤマヒデ厚削りだし鰹を使用。味噌から、水、醤油まで、全てにこだわっている材料を使う姿勢が嬉しい。自然薯という素材をおいしく食べさせてくれる店だと楽しみにして行っただけに、期待を超える取り組みに好感を持つ。

数種のメニューの中から選んだのは、とろろ御膳（1200円）。自然薯とろろ、雑穀米の釜飯、自然薯豆腐、むかご味噌和え、味噌汁が付くセット。求めるは、原材料より、料理の味。で、正直な感想、期待以上のおいしさ、自然薯の甘みとだしの旨みが絡まり、ご飯がすすむこと。本物のとろろ料理は、きっとおいしい、そんな思いでたまに挑戦するこの料理も、ようやくそのレベルのものに出会えたと思

いつつ。雑穀の入った粘り気のある釜飯と、滑らかなとろろを、のどに流し込むように、一気に食べ終える。

贅沢を言えば、一つ味を変えてくれるようなおかずがほしかった。言うなれば、牛タンなどが望ましい。ベタだなと思いつつ、シンプルなご飯ものだけに、アクセントになるようなおかずがあってもいいのではと。料理はおいしいけど、客層が近所のばあさん達なのは、そんな理由があるんじゃないかと思ひもして。健康食としちゃ間違いなく一級品なんだけど、しっかりした味を求める若い人には、ちょっと物足りなさを感じるかもしれないな。



左：倭風酔入口。



右：とろろ御前（1200円）

国府山城

50分程昼食休憩。14時前に店を出て、次の目的地、国府山城に向かう。

そんな城ないですよとは、レンタカー営業所で最初に行き方を聞いた時の相手の答え。ちなみに、今回訪ねた3つの城全てそんな回答だ

った気もするが、国府山城は、見つけるのさえ苦労した地にあったから、印象的。御着城は、少なくとも御着駅という地名にちなんでいたからだいたい想像ができたが、国府山城にちなむ国府山を地図で見つけることができなくて。唯一の情報は、雑誌 BANCUL による、妻鹿駅から北へ徒歩5分というもののみ。

地図の妻鹿駅を基準に、徒歩5分程度の範囲を車でうろうろ、住宅街に迷い込んだその先に、ようやく国府山城跡らしき場所を見つける。城跡前の道は、あまりに細いため車を止めておけそうになく、城跡用駐車場などももちろんなし。そこで目を付けたのが、国府山城跡前にある施設、兵庫県企業庁市川工業用水管理所という事務所の駐車場。まあ、文句は言われんだろうけど、一応挨拶と、二階の事務所に立ち寄り、管理人のおじさんに、1時間ほど車を止めさせてくださいとお願い、許しを得て気兼ねなく城跡に向かう。

国府山とは、標高98mの小さな山。市川という大きな川の左岸にあって、その山頂にあったのが、国府山城。官兵衛が、秀吉の毛利攻めのため、自らの居城である姫路城を譲り渡した話は、既にかいたこと。そして、居城を失った官兵衛が移った先が、ここ国府山城になる。元々1333年赤松則村の勇将・妻鹿孫三郎長宗が築いたのが始まりで、官兵衛の祖父重隆が妻鹿氏の女を娶っていることから、黒田氏と豪族・妻鹿氏との結びつきは深かったよう。そんな縁もあり、官兵衛は、その後国府山城で過ごすことになる。



左：川の堤防から見える、国府山。この山頂に、城があった。ちなみに、下の白い建物が、車を止めた事務所。



右：隣を流れる市川。かつては、山の急斜面と川幅の広い天然の堀を擁する、立地に優れた堅城だったことが想像できる。山頂からは、北に姫路城と市街が一望でき、その戦略的な場所柄がよく分かる。

車から見えた城跡らしい石碑は、妻鹿城址と刻まれており、その隣に小さな祠を要する荒神社を見つける。国府山城址に行くには参道脇から入る山道を登る必要があるようで、まずは神社に一礼し、敷地に邪魔することを告げ、山の中に分け入っていく。



左：道路脇から見える、大きな石碑。



右：この石灯籠の間から、山頂へ向かう山道が始まる。もちろん最初

に出迎えてくれたのは、蜘蛛の巣で。

意外と山道が整備されていたのが、驚き。少なくとも、倒れた木で道がふさがれていたり、草が生い茂っていたり、土砂が崩れているなんて状況はなく、山道を普通に登っていくことができる。なにやら、地元の人達が、草刈等管理をしている様子が伺える。ただ、所詮は、雑木林に囲まれた山の中。いたるところにかかる蜘蛛の巣はもちろん、辺りを飛び回る蠍蚊、大きめな蜂達に何度と遭遇。観光客はもちろん、近所の人も誰もいない中、ただ、ひたすらと汗をかきつつ、山を登っていく。もちろん、ここでも何度と格闘したのが、珍しい来客に驚く蜂達。出会う度に、警戒する蜂とにらめっこ、その都度、これを持ち越えないと山頂に行けん、と意を決して突っ切ること数回、約30分かけ、山頂に到着する。

平らな土地が広がる山頂は、ここに城があったんだなと想像させるに十分な景色。さて、姫路市を見下ろす景色はどこから見えるのやら、と本丸跡を目指して歩いた時に、何度目かの危機が訪れる。蜂は克服した、と山登りを通じて密かに付けた自信も、数匹の群れを前に体が動かず。離れて行ってくれれば、としばらく様子を見るも、行き先の道をふさいだまま、こちらをじっと見つめる始末。このまま突っ切れば、意外とあっさり通れるかも、なんて勝手な期待も、目の前のリスクにチャレンジする程の動機付けにはならず。うん、十分頑張ったよ、と山頂にたどり着いた自分を褒め、素直に引き返すことに。



左：これが、山道。蜘蛛の巣と、蜂と、蚊と、蛇を警戒しつつ、汗をかきつつ山登り。

右：山頂の様子。ここを突っ切ることができず・・・。



山を下りる途中、町を見下ろす景色に出会ったから、一枚。

三木城

国府山城には、45分程滞在。下山し、車で動き出したのは、15時前。車を借りて、はや5時間、電車移動はやはり諦め、このままレンタカーで、目的地である三木城跡を見に行くことを決意。地図を片

手に、姫路市と隣接する三木市を目指して行動を開始する。

ナビがなくても、事前に地図をしっかりと頭に入れ動いてみれば結構スムーズに目指すところに行けるものだ、なんてそれまでの自信も、この長距離移動でもろくも崩れる。今回の目的地三木市は、姫路市中心地から、東へ40km。高速道路である山陽自動車道を使うと、20分程度で行けるみたいだけど、無駄な出費を極力抑えるは、いつものテーマ。海に沿って走る加古川バイパスで三木市を目指し、さっそくここで失敗をする。数キロごとに設けられている高架となっているバイパスの出口を、予定より2つ行き過ぎ、大幅なロス。出発前に出口を簡単に確認し、もう一度近づいてから確認しようと思うも、信号もなく順調に流れる状況に、地図を確認する余裕は与えられず。このままじゃ神戸に着いてしまう、と辺りの標識によりやく危機感を抱き、バイパスを下りて地図を開き、行き過ぎたことを確認。再びルートを練り直し、目的地に向かう。

目的地までの道順のイメージを頭に入れ、後は、そのイメージに併せて適当に行けばなんとかなるだろ、がいつものドライブ。そして、いつの間にか道を間違え、気付かずにえらい遠くに来たものだ、ってなるのはよくやること。まあ、一人で気楽に移動しているから、少々迷いは許容範囲内なんだけど。

でも、さすがに知らない土地で時間が限られた中、あまり大きな間違いはできないと、地図で現在地を把握しながら慎重に進む。警察の速度違反取締りを順調に回避し、何度かのややこしい道順を克服し、次々と変わる景色を楽しみながら、1時間10分後、三木市に到着する。

今回の目的地は、三木市にある三木城。持っている情報は、三木駅から上の丸公園（三木城址）まで徒歩でいける距離ということだけ。どのくらい歩くか、どちらの方向にあるのか、上の丸公園とはどこか、そんな情報は一切なく。自分のイメージは、少し小高い山の上にある姿。雨が降り出しそうな空模様に、できるだけ車で向かおうと、周辺の小高い山らしき場所を目指して移動を開始する。



三木鉄道終点、三木駅。ここを基準に、行動開始。

辺りを見回しながら、どこか看板は出ていないかと必死で探すも、どこにも見つけることができず。ここはもう徒歩圏内を過ぎていると、再び出発地点に戻ることに3度、マイナー観光地だとは思っていたけど、ここまで分からないとは・・・と自力で探すことをすっかり諦める。

とりあえずひと休みと車をとめた駐車場の隣に、求めている施設を発見。その名は、三木市観光協会。ここで聞けば、さすがに場所は分かるだろうと、喜び勇んで建物内へ。観光協会は今日休みだという同じ建物内にいた事務員さんの言葉は、さして問題じゃなく。三木市の観光情報は、求めておらず、ただ、三木城址への行き方を教えてくれ

と。そして、それならと手渡されたのが、一枚の手作りパンフレット。三木城址の案内という題と共に、道順、三木城跡の施設を書いた、A4サイズの手書きの地図。これを求めていたのよと、お礼を言って、案内所を後にする。

実は、すぐ目の前にある小高い丘の頂上が三木城跡だということが、地図により発覚。そこに着くまでの道のりは、大通りから離れた細い道を抜けた先で、こりゃととても初めての者が分かることじゃないかと、地図を手に入れた偶然を喜ぶ。そして、到着。頂上に開けた広い平地には、市立図書館が建てられていたり、なにやら有効活用されている模様。史跡が姿を変えていく姿にちょっと寂しさを感じつつ辺りをうろうろ歩いていると、その奥に、しっかりとらしい城跡を発見。山頂から眺める街並みに、求めていたのはこの景色よ、と思いつつ。

「三木城攻め」

書写山円教寺編でも簡単に書いたけど、再び三木城についてふれる。

1578年、秀吉の中国毛利攻めに突如反旗を翻し、播磨国の反織田勢を取り込み自身の城である三木城にこもった別所長治を倒すべく、秀吉による三木城攻めが始まる。三木城を見下ろせる、東にある平井山に秀吉は本陣を張り、三木城を完全に包囲する形で、秀吉の武将が周りを囲む。ちなみに、官兵衛はこの三木合戦に参戦するも、半年後に本陣に兵を残し下山することに。毛利方に寝返った荒木村重を翻意させるため岡城に向かい、主君小寺政職の裏切りによりそのまま囚われたとは、3つ前の御着城の項で書いたこと。

後に、三木の干殺しと称された兵糧攻めの戦いは、約2年間に及ん

だ。城を完全に包囲し、間道という間道を押さえ、毛利氏からの支援も一切断ち切り、相手の飢えにより戦意喪失を狙うという戦略。血で血を見る戦いが嫌いだった秀吉らしい、頭を使った戦い方。力で押しに押しという、それまでの戦国時代の戦いを変えた新たな時代の戦略が、ここに生まれる。

この秀吉の戦略は、決して敵には望ましいものではなかった。勝つにしろ、負けるにしろ、正々堂々と戦いを挑み華々しく散っていくという数的に劣勢だった別所氏の思いを打ち砕く、戦わずして死んでいく武将達の無念な思い。せめて敵を一人でも倒してと城外に突出しても、遠くに柵を作り防御に徹した秀吉軍に一斉射撃で狙い打たれ、待っているのは確実な死のみという状況。それでも、やせ細った体で最後の気力を振り絞り、時に秀吉軍を後退させるような奮戦を何度か行い、ついに気力が失せ、籠城から2年経過後、三木城は陥落することになる。

ここでとった秀吉の行動は、その後の戦いにも何度も使われ、世間の彼の評判を高める契機となる。調略による戦術を得意とした秀吉が、今後それをさらに効果的にするために、比叡山焼き討ちにより既に全国でその人間性を恐れられ始めた織田信長への世間の意識を変えるために、先を見越した彼の意思から出た決断。城主・別所長治とその一族の自害のみを求め、戦いに参加した他の敵将は、罪に問わないというもの。そして、長治は決断する。自分の死をもって皆が助かるなら、命を捧げよう。最後に長治が残した句が、石碑となってその地に残る。「今はただ恨みもあらず諸人のいのちにかはる わが身と思へば」。自身の判断ではなく周りに押されて戦いに突入しながら、

最後は皆の命を守るため喜んでその現実を受け入れた23歳の若者の気持ちを十分察することができるその句を思いつつ、彼らが戦った三木城跡地を散策する。



左：三木城発掘調査中だというブルーシートの先の林が、本丸跡。

右：大きく広がった山頂にある平地。ここに、多くの兵が集まっていたんだろう。



三木城址から、北側を見下ろす景色。ここ三木城は、三木の平野にある釜山の山頂。目の前を流れる川が、美囊側川で、三木城の天然の外堀をなしていた。川を渡った先の遠くに見える山の手前に、包囲している秀吉軍の武将が何重と配置されていた。秀吉がいた本陣は、この

写真じゃ見えない、もっと右にある山となる。

三木側には、どんな戦い方が可能だっただろう、死を覚悟して全軍が突出した時、秀吉を追い詰めることができただろうか。秀吉側は、相手が降伏しない時、どのように犠牲を少なく攻めることができただろうか、相手が決死の覚悟で打ち出してきた時、どのように対応しただろうか。そんなことを思いつつ、景色を眺めて、過ぎ行く時間を楽しむ。

山口へ

1時間近く三木城跡界隈を散策し、17時過ぎに姫路に向かって車を出す。レンタカーを返して、新幹線で帰路につくために。三木城散策中に怪しくなっていた空模様は、辺りを暗闇で包み、大きな雨粒を降り注ぐ。行きとは違う道を、標識に従い素直に進み、1時間程で姫路市に到着。これで見納めかなと再び現れた姫路城を右手に見つつ、駅へと向かう。100kmを超えた走行距離に、今日一日を振り返りながら、ガソリンを補充、18時40分、忘れ物がないことを確認し、車を返す。

降り続く雨に、再び街中を歩いて夕食を食べるプランを諦める。一日中動き回り、すっかり疲れ切った体が、帰宅を促す。最後の食事に、姫路らしい駅弁で締めようと、煮アナゴ弁当を選び、19時7分発博多行きの新幹線に乗り込む。前日早朝に家を出た1泊2日の姫路一人旅は、二日目深夜に、こうして幕を閉じた。

(5) 旅を終えて

冬の海外旅行にかこつけ始めた夏の国内旅行は、2回目を迎える。夏を選ぶ強い思いは、特にない。休みを取りやすい現実的な状況と、誕生日というお金を使うに格好の理由という、それなりのきっかけがあるに過ぎない。もちろん、無駄にお金を使う気はない。その価値がある魅力的な場所があるから、出かけていく。それを十分満喫できるだけの準備をし、確信を持って。そして、29回目を迎えたこの夏も、自分を駆り立てるそんな場所に出会い、この旅を決意する。

その歴史と、そこで生きた惚れ込む程のいい男達との出会いを与えてくれた、本に感謝。黒田如水という隠居後の名称は知っていても、その生き方も詳しい人物も知らなかった、黒田官兵衛との出会い。日本で生きた人物に焦点を当て、いつも人というもののあり方を教えてくれる、司馬遼太郎。そして、今回の官兵衛との出会いも、彼の作品「播磨灘物語」から。

河井継之助を追った新潟旅行に続き、その物語で活躍した官兵衛の人生を追ったのが、この旅であった。彼の見た視点で、彼がどう考え、何をもとに決断したのか、全身で感じるために。その価値観に自分との共通点を、その人生に自分の目指す生き方を感じる。既に一つの時代でその生き方を実践した尊敬できる人生の師として、自分ならもっと違うアイデアが出せたんじゃないかと認めるからこそ負けたくないライバルとして憧れる人物に対し、その視野を知りその領域に近づく方法、同じ地に立ち彼自身へとシンクロさせ、彼自身を自分の中へと取り込んでいく、いつもながらの楽しみ方。読んだ本からは絶対

にたどり着けない、その地に立つからこそ見えること。本で得た彼の生き方を、確実に自分のものとするために。

そんな思いを抱いて旅立ついつもの旅、そして今振り返り、自分が想像していた以上のものを得て来たことを確信する。

一つには、姫路という日本の一地方都市を知ったこと。同じく大都市に隣接し、観光地を有する県として、どのようにあるべきかという一つのあり方を知ることができた。進んだ商業振興を始め、その地を踏んだからこそ見えたこと、これは、今後自分の判断基準として、大きな役割を果たすだろう。

そして、二つ目は、官兵衛と同じ視点に立ったことで得た、目指すべき生き方への確信。表舞台での脚光を無理に求めず、自分のアイディアに懸け、周りを活かすことに満足感を得る。参謀という裏方でありながら、こうして歴史に名を刻むまでの活躍をした官兵衛の人並み外れたレベルの高さは容易に想像できるが、だからこそ、目指すべき目標にふさわしい。彼自身を少しでも自分に取り込むことを意識して、彼の生きたその地で感じたことは、今後自分の幅として、確実に厚みを持たせてくれることだろう。

三つ目。あらためて感じた、旅での人との出会いの多さ。日常から解放された気分の高揚と、その場限りだという気楽な気持ちだからこそなせること。普段の生活じゃありえない、気軽に声をかけている自分に気付く。そこに、思わぬ人との出会いが生まれる。その人との関わりが、ただ自分ひとりで目標だけに向かって動いていたら味わえなかっただろう経験をもたらす。きれいな景色やおいしい食事より、記

憶に残っているのが、そこで出会った人達との関わりだったりすることは、これまでの旅が物語る。そして、当然のようにそこに待っていた、思い出に残る多くの人達との関わりは、大小関わらず今後の自分の行動に影響を与えることだろう。積極的な行動がもたらす幸運。それを求めて、再び旅に出ようと思わせてくれる。

人は、様々な経験を経て、少しずつ自分の幅を広げ、成長していく。その手段が、旅である必要は、もちろんない。ただ、それを通じて確実に得るものがあるから、そしてそれ以上にそこで初めて気付く自分自身がいるから、その手段として、自分は旅を利用する。一人で動く時間の長さが、より深い自分との語らいを可能にする。現実の生活とは異なる、非日常の出来事。

旅に見出す目的はそれぞれ。仲間や家族との語らいもあろうし、恋人と一緒に過ごし深い関わりを得るためでも、心をふるわせるような美しい景色に出会うためや、自分自身との語らいだったり、そこには、それぞれに価値のある目的がある。どんな目的を求めても、その一つの時間を過ごした時、自分で想像した以上の答えを返してくれる、それが旅の魅力なんじゃないかと、自分は思う。だからまた、自分自身の何かを求めて、きっと旅に出ようと決意することだろう。

そして、そんな旅を表現する機会があることを、心から感謝している。お金じゃ買えないものがある、そんなセリフがストンと入ってくるのが、旅を終えての今の気持ち。自分が、そこで見、感じたことが、この旅日記を通じて読んでいる方に伝われば、僕が官兵衛にシンクロし彼の世界を垣間見たように、僕にシンクロし僕の求めた世界をイメ

ージしてもらえたのなら、なにより嬉しいことである。

そろそろ旅に出てみようか、そんな気持ちになってもらえればと、密かに思いを込めつつ、旅から43日目の今日06年9月10日、この旅日記を書き終える。それでは、また次の旅日記でお会いすることとして。